

美術科

題材の全過程を通して自己実現を図る美術科の授業実践

—ドキュメンタリーポスターの制作と相互鑑賞を通して—

松本 裕子

1 はじめに

中学校学習指導要領美術の指導計画の作成と内容の取扱い2(3)では、「主題を生み出すことから表現の確認及び完成に至る全過程を通して、生徒が夢と目標をもち、自分のよさを発見し喜びを持って自己実現を果たしていく態度の育成を図るようにすること。」¹⁾とし、「特に発想や構想から完成までの全過程にわたる表現の確認を通して、学習活動への自分の取組を見つめ、向上を目指して工夫し、自己のよさを確認していく主体的な態度を育てていくことは、自発性、主体性、ひいては自己教育力等の育成を促す重要な契機となる。」²⁾と解説している。

私のこれまでの実践を振り返ってみると、生徒が意欲的に取り組める題材を設定し、発想・構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力を習得する中で、自分の良さに気付かせるような指導はしてきたが、上記のような生徒が夢や目標を持ち、自己実現を果たしていけるような題材設定や全過程を通じた指導については十分でない。

そこで、「なりたい自分」や「夢」に迫る題材を工夫し、題材の目標やそれに迫る生徒の姿、適切な指導と評価を明確にした授業実践により、自己実現を果たしていく態度の育成を図るための手立てを明らかにしていきたいと考えた。

2 研究の構想

(1) 研究仮説

生活を題材とし、タキソノミーテーブルにより題材の目標群と具体的な生徒の姿を設定して指導

すると共に、ドキュメンタリーポスターを作成し、相互鑑賞を実施すれば、生徒の自己実現を果たしていく態度を育成していけるであろう。

(2) 仮説の具現化のための具体的方策

仮説の具現化のための構想を図1に示し、具体的方策の詳細を①～③に示す。

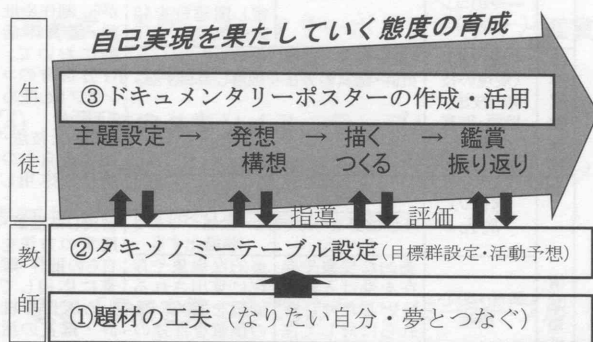


図1 仮説の具現化のための具体的方策

①題材の工夫

福本ら³⁾は自己実現を果たすための題材の工夫として「『なりたい自分』や『将来の夢』など、未来の自分、それに向けた自分の生き方を頭に描かせ課題とし、それを自画像や彫刻、空想画などで表現するなどして、形や色彩、材料の工夫で具現化していくプロセスを経験させる。そこでの有機的な活動の展開により自己実現を図っていく姿勢につながっていくと考える。」と述べている。本実践では、「なりたい自分」をめざして部活動や行事に一生懸命取り組む自分自身の姿を主題にし、ポーズや構図・彩色を工夫することにより、自己実現を果たしていくことにつながるようにしたいと考えた。

②タキソノミーテーブルによる目標群と具体的活動例の設定

所属校図画工作・美術科部会では、めざす子ども像を「美的体験を重ねる中で、自分が美しいと感じる価値を大切にできる態度を身に付け、さらに他者の価値観を理解し、自他を含めた美意識を高めようとする子ども」とし、タキノミーテーブル(表1)の開発実践に取り組んでいる。

授業者が表現の各段階の具体的活動例を予め予想して、自他による評価や相互鑑賞を行わせ、自分らしさや改善点を確認し自己調整する力の育成を図ることとした。

③ドキュメンタリーポスターの作成・活用

生徒の作品は毎時間変化し、うまくいくときもあれば、思い通りにならないときもある。長時間の題材になればなるほど、その時思いついたこと、頑張ったことや工夫したことがあっても、自他の評価は完成作品の出来栄えに集約されてしまう傾向があることは否めない。そこで、毎時間後の作品を撮影し、並べて見ることができるよう題材を貫くドキュメンタリーポスターを作成し、振り返りに活用することが有効ではないかと考えた。

また、相互鑑賞において作品が変化するに至った思いや工夫(あるいは失敗)について写真やメモをもとに質疑応答するなどして他者とコミュニケーションをとることにより、メタ認知能力を高め、生徒の美意識の向上をめざすものである。

表1 図画工作・美術科のタキノミーテーブル

	知識の次元	認知プロセス次元		
		1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
認知領域	事実に知識(美術用語、造形の要素と原理)	これまでの記憶から、美術用語や造形の要素と原理を想起して、新しい学習内容に関連づけている。	制作や批評・鑑賞の活動において、状況に適した美術用語を用いたり、造形の要素と原理を活用したりしている。	制作や批評・鑑賞の活動を通して、美術用語や造形の要素と原理に関する新しい認識を獲得している。
	概念的知識(題材のテーマのコンセプト)	題材のテーマのコンセプトを認識・理解している。	制作や批評・鑑賞の活動において、題材のテーマのコンセプトを同じく関連性を判断している。	題材のテーマのコンセプトをベースにしながら、制作や批評・鑑賞の活動において、自分自身のコンセプトを深めている。習得した技法・技術を自らの制作に応用している。
精神運動領域	手続的知識(表現の技術と技法、批評・鑑賞の方法)	技法・技術を理解し習得する。批評・鑑賞の方法を理解し習得する。		
情意領域	感情の次元	情意プロセス次元		
		1 受容する/反応する	2 価値づけする/組織化する	習得した批評・鑑賞の方法を自らの批評・鑑賞に応用している制作や批評・鑑賞の活動を通して、自己自身の価値の意識や感情との関連で吟味している。
	興味・関心・態度	美的な現象や存在を受け入れようとしたり、それらに対して注意を向けたりしている。	美的な現象や存在に見出される価値を認め、その価値を自分の持っている価値の意識や感情との関連で吟味している。	
	美的な価値観(美しさやよさに関する価値の意識や感情)	美的な現象や存在との出会いから、自分の持っている価値の意識や感情を喚起している。		
メタ認知	メタ認知の次元	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	自分らしさや改善点の認識に基づいて、自分なりの美意識を形成したり深めたりしながら、制作や批評・鑑賞の活動に取り組んでいる。
	自己知識	ポートフォリオ等からこれまでの学習を思い出している。	制作や批評・鑑賞において自分らしさが表れている点を分析している。	
	自己調整		制作や批評・鑑賞において改善すべき点を見出している。	

タキノミーテーブルとは、ブルームの提唱した評価の考え方「タキノミー」を継承・発展させた「新タキノミー」を美術教育の評価に応用したもので、「認知領域」「精神運動領域」「情意領域」「メタ認知領域」の4領域を縦軸とし、認知プロセス次元(思い出す・理解する、応用する・分析する、評価する・創造する)を横軸として目標群を設定している⁴⁾。

本年度は、特に「メタ認知領域」に焦点を当て、

3 研究の方法

(1) 対象生徒

広島大学附属三原中学校 7(中学1)年生
2組 41名(男子21名 女子20名)

(2) 調査時期

平成24年9月～平成24年11月

(3) 題材

「動きを見つめて」(水彩画による人物画)

4 題材指導計画

(1) 題材について

①授業のねらい

本題材「動きを見つめて」は、部活動等に取り組む自分の一瞬の動きをとらえ、水彩画で表現することを通し、主題を生み出し、創意工夫して表現するための基礎的な技能を身に付けさせるとともに、生活を豊かにする創造活動の価値を考えさせるものである。つまり、主題に沿った表現とな

るよう、人物のポーズや構図・水彩絵の具の使い方等を工夫することにより、絵画表現の基礎的な技能を身に付けさせるとともに、振り返りや相互鑑賞により、その印象を強く心に留めたり、心が満たされたりする経験をさせることをねらいとしている。

②生徒の実態

本学級の生徒は、本題材の前に取り組んだポスターのアイデアを出す段階では約8割が、イメージマップを活用してアイデアを出し、自分らしい発想をしようとした。しかし、イラストの構想段階で、資料等を活用して工夫しようとする生徒は1割程度であった。また、美術アンケート（7月実施）「自分の作品のよさや工夫点を言える」の肯定的回答が57.5%である等、自分の作品に自信が持てない実態があり、完成度の向上や鑑賞による相互評価が必要であると考えた。

③指導にあたって

人物クロッキーを体験させた後、部活動等における自分たちの一瞬の動きをとらえて表現したいテーマを決め、アイデアスケッチをさせた。下絵づくりや彩色では、主題を最も表現できる構図や表現内容を工夫できるよう、写真等を参考に人物の動きや色を確認したり、伝えたい内容が表現できているのか主題を振り返って確認したりした。また、制作途中や完成作品のよさを交流しあえるよう、アイデアスケッチや制作途中の写真などを添付したドキュメンタリーポスターを作成し、ポスターセッションにより、お互いの工夫点や表現のよさに気付けるようにした。

(2) 題材の目標

- ・自分の生活を表現することに関心を持ち、主体的に心豊かな表現の構想を練ったり材料や用具の特性を生かしたりしようとするようにする。
- ・自他の作品に関心を持ち、主体的に見方や理解を深めるようにする。
- ・感性や想像力を働かせて、感じ取ったこと、考えたことなどをもとに、主題を生み出し、一瞬の動きをとらえて、単純化や省略、強調を考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構造を

練るようにする。

- ・感性や造形感覚などを働かせて、材料・用具の特性を生かし、自分の表現意図にあう方法を工夫したり、彩色の順序を考えたりするなど、見通しを持って創造的に表現するようにする。
- ・感性や想像力を働かせて、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り味わうようにする。

(3) 題材計画 (全13時間)

- 第1次 クロッキー (2時間)
- 第2次 テーマ設定・アイデアスケッチ (1時間)
- 第3次 鑑賞 (1時間)
- 第4次 下絵づくり (1時間)
- 第5次 彩色計画・彩色 (5時間)
- 第6次 ドキュメンタリーポスター作りと鑑賞 (3時間)

(4) 本題材のタキソノミーテーブル

「認知領域」「精神運動領域」「情意領域」「メタ認知領域」について表2を設定した。

表2 「動きを見つめて」のタキソノミーテーブル

< 認知領域 >

知識の次元	認知プロセス次元		
	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
事実的知識 (美術用語、造形の要素と原理)	これまでに見たり描いたりした人物画を思い出し、新しい学習内容「動きを見つめて」と関連付けをしようとする。	人物画の要素である「動き・プロポーション・構図」等の用語を用いたり、水彩絵の具の技法名を確認したりして、活用しようとしている。	完成作品の振り返りや相互鑑賞を通して、人物画の要素や水彩画の技法に係る用語を用いて、自分がどのように表現を工夫したかを説明しようとする。
概念的知識 (題材のテーマのコンセプト)	自分を主役にした人物画を描き、頑張っている姿や憧れを表現することに価値を見出そうとする。「サッカーでかっこよくシュートを決めたところを表現しよう。」	自己・他者評価により「動きのある人物画を生き生きと描く」というテーマにそった作品になっているのかを判断しようとしている。「もっとポーズを大胆にしないと動きが伝わらない。」	「動き・主題」等題材のテーマに沿った振り返りをしようとする。

<精神運動領域>

知識の次元	認知プロセス次元		
	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
手続的知識 (表現の技術と技法、批評・鑑賞の方法)	技法・技術を理解し習得する。批評・鑑賞の方法を理解し習得する。 水彩絵の具の技法を理解し筆の種類や混色を工夫して彩色しようとする。「背景は、大きい筆でタッチを残して彩色しよう。」	混色や、筆のタッチ、デッサンの丁寧さや表情など、視点を持って鑑賞しようとする。「表情が真剣さを伝えているね。」	色や形の美しさ、技法の工夫などについて、自作を説明すると共に、友だちの作品へ対する意見を言おうとする。制作を通して、自分について力を振り返り、技能面の向上について書いている。

<情意領域>

感情の次元	情意プロセス次元		
	1 受容する/反応する	2 価値づけする/組織化する	3 評価する/創造する/内面化する
興味・関心・態度	友だちの作品や、掲示作品に興味を持ってみようとする。「モナリザの視線は不思議だね。」	主題や色や形・構図などに基づいて、参考作品や自作を鑑賞し、興味を持つ。「部活動で頑張っている姿が生き生きと伝わってくるね。」 「芝生の緑が工夫されているね。」	制作を通して、自分について力を振り返り、情意面の向上について書いている。
美的な価値観(美しさやよさに関する価値の意識や感情)	水彩絵の具の美しさに気付き、混色など工夫して彩色しようになる。「その色きれいだね。どうやって作ったの。」		

<メタ認知領域>

メタ認知の次元	認知プロセス次元		
	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
自己知識	ポスターカラーと水彩絵の具の共通点や相違点をポートフォリオをもとに確認しようとする。「絵の具の溶き方や、水の量により、印象が違うんだな。」	アイデアスケッチや完成作品の鑑賞で、振り返りポスターに工夫点を書いている。「この段階で、人物の色をもとに、背景の色を選択して彩色できた。」	ドキュメンタリーポスターを用いた鑑賞により、形や色から感じるイメージと作者の意図を確認したり、制作過程における変化を楽しんだりして、見る視点を広げようとする。
自己調整		制作過程や完成作品の鑑賞において、改善点を見出している。「人物の肌の色を混色で工夫しよう。」	

(5) メタ認知とその具体的活動

メタ認知領域の育成のための手立てとして、予め「主題等の設定」「発想・構想」「描く・つくる」「鑑賞」の各段階の予想される具体的活動と指導等の例を表3のように設定した。

表3 メタ認知に係る具体的活動等例

※は、メタ認知を促すための指導

学習過程	メタ認知	思い出す・理解する	
		ポートフォリオなどからこれまでの学習を思い出している	具体的活動
主題等の設定		参考となるポートフォリオ等	<ul style="list-style-type: none"> ・主題設定のためのイメージマップやワークシート ・制作手順の説明プリント ・自己評価 ・過去の作品(写真等) ・教科書 ・資料集
			<ul style="list-style-type: none"> ・主題を見つけるための資料としてポートフォリオ等を振り返り、類似内容や関連する既習事項を見つけようとする。 ・大まかな見通しを持ったり、できそうな表現を確認するため、過去の学習を参考にしようとする。 ・表現したいこと、できそうなこと、困難を伴いそうなことを既習事項を参考にイメージしようとする。 ※参考になる既習事項について声掛けや、ページの紹介をする。
発想・構想		<ul style="list-style-type: none"> ・アイデアスケッチ ・自己評価(発想構想の記録) ・教科書 ・資料集 	<ul style="list-style-type: none"> ・過去の学習資料から、発想構想の参考になるものを探す。 ※参考になる既習事項について声掛けや、ページの紹介をする。 ※参考作品を提示する。
	描く・つくる	過去の作品(写真等)	過去の学習資料から、参考となる表現・道具・材料を探す。
鑑賞		題材の振り返り	過去の学習資料から、参考となる表現・道具・材料の効果を、[共通事項](色や形イメージ等)で確認する。

メタ認知 学習過程	応用する・分析する	
	制作や批評・鑑賞において自分らしさが表れている点を分析している。	制作や批評・鑑賞において改善すべき点を見出している。
主題等の設定	具体的活動 ・題材のねらいにそって自分らしい主題を持つとする。 ※イメージマップ等ワークシートを示す。	具体的活動 ・題材のねらいと自分の主題の摺合せをし、適切なのか、改善が必要なのかを判断しようとしている。 ・必要であれば、主題を改善しようとしている。 ※ワークシートで、手順を示す。
発想・構想	・主題をよりよく表現するようなアイデアになっているかを判断する。 ※工夫点を書くようにする。 ※視点を示し、自己評価・相互評価するようにする。 ※過去の学習資料や作品を振り返るようにする。	・改善すべき点に気づき、改善に向けて試行錯誤する。 ※参考作品を示す。 ※複数の選択肢を紹介する。 ※過去の学習資料や作品を振り返るようにする。
描く つくる	・主題に沿って、材料や用具を活用して技法等を工夫し自分らしい表現できているかを判断する。 ※工夫点を書くようにする。 ※視点を示し、自己評価・相互評価するようにする。 ※過去の学習資料や作品を振り返るようにする。 ※客観的な意見を取り入れるよう促す。	・より美しく自分らしさを表現するために改善すべき点に気づき、必要な技法や材料・道具を用いて、改善に向けて試行錯誤する。 ※参考作品を提示する。 ※複数の選択肢を紹介する。 ※過去の学習資料や作品を振り返るようにする。 ※客観的な意見を取り入れるよう促す。
鑑賞	・制作過程または完成段階において、自分らしさやよさが表現できているかを判断する。 ※工夫点やついた力を書くようにする。 ※視点を示し、自己評価・相互評価するようにする。 ※過去の学習資料や作品を振り返るようにする。	・制作過程または完成段階において、より美しく自分らしさを表現するために改善すべき点に気付く。 ※参考作品を提示する。 ※複数の選択肢を紹介する。 ※過去の学習資料や作品を振り返るようにする。 ・完成作品をもとに、次への意欲を持つ。

5 授業の実際

第1次 クロッキー（2時間）

バランスと動き・重心を意識させ、立ちポーズ・座りポーズなどを班ごとに鉛筆クロッキーをした。時間は8分から始め、5分に短縮していった。

第2次 テーマ設定・アイデアスケッチ（1時間）

ワークシート（図2）に「入学してがんばっていきいたいこと・その中の一瞬を絵にして表現してみたいこと」を書きださせ、その中からテーマを決定していった。

アイデアの参考とするため、自分たちでポーズをとってスケッチしたり、写真に撮ったりした（図3）。また、実際の活動の様子を写真に撮ったものを教室の壁面へ掲示し参考にさせた。

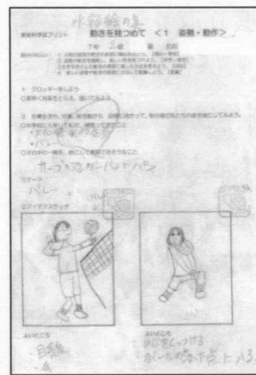


図2 ワークシート

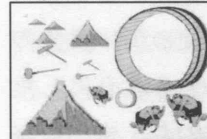


図3 ポーズ

第3次 鑑賞＜構図を考える＞（1時間）

葛飾北斎作「富嶽三十六景 尾州不二見原」を背景と人物等に分けて提示し、班ごとに、思い思いの作品に再構成することにより、主題の表し方を考えた。（図4）

切抜き用シート〔人物等要素〕



台紙用シート〔背景〕



図4 グループ学習の様子

第4次 下絵づくり（1時間）

アイデアスケッチをもとに主題を力強く表現するための構図について考え、下絵を制作した。

第5次 彩色計画・彩色（5時間）

水彩絵の具の技法について体験した後、主題を表現する配色を工夫して彩色した（図5）。

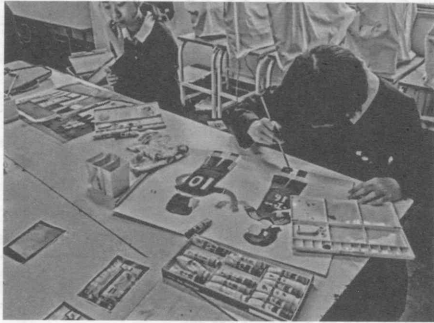


図5 彩色の様子

第6次 ドキュメンタリーポスター作りと鑑賞（3時間）

下絵段階から撮った写真や振り返りシートをもとに、色画用紙を台紙として、ドキュメンタリーポスターを作成した。写真を制作過程の順に貼り、各過程においてどのような工夫をしたのか、何に気付いて、どう変えていったのかを吹き出しなどを使って説明していった（図6）。



図6 ドキュメンタリーポスター

さらにポスターセッションとして、作品とドキュメンタリーポスターの両方を使って、自分の作品を解説し、友達から感想をもらうようにした（図7）。小グループで鑑賞したのち、班の代表を決めて、発表方法を工夫してグループ間交流をした。鑑賞の際には、司会者・タイムキーパーなどの役割を持たせ、ワークシートに感想を残すようにした（図8）。

なお、作品を見やすく提示できるよう、画板やミニイーゼルを活用した。



図7 ポスターセッションの様子

友達に対して

- ・作品の良いところ
- ・ドキュメンタリーポスターから分かったこと
- ・説明の仕方の良いところ

自分自身について

- ・友達から言われてうれしかったこと
- ・ドキュメンタリーポスターを作ってよかったこと

図8 ワークシートの項目

6 結果と考察

(1) 題材の工夫は自己実現に有効であったか。

ほとんどの生徒が中学生になり、目標を持って取り組んでいる部活動や習い事、頑張った行事での自分の姿（運動会2人、文化祭2人、習い事2人、その他部活動）を積極的に描こうとしていた。

次の感想1～4は、生徒がドキュメンタリーポスターを使って説明した内容の抜粋である。主題（自分が頑張っていること・頑張ったこと等）とともに、主題をよりよく表現するために色や形について工夫したこと、試行錯誤の中で気付いたことを自信を持って語ろうとしていることが読み取れる。

<感想1>

僕の夢はサッカーにかかわる仕事です。たとえば、サッカー選手やレフリーやコーチなどです。夢を現実に変えるには努力することが大切です。（中略）この絵は、夢の中の自分を描きました。この絵には2つの場面を描きました。1つはキープのシーンで、もう一つはヘッ드의シーンです。画面を2つに分け、その2つに時間の差をつけ、空



や芝生の色などの変化で表しました。2つの場面を稲妻で区切り激しさを表しました。この絵で色の変化や彩色の仕方、表したいことを伝える工夫ができるようになりました。

＜感想2＞

この絵は、バレーをしているところを描きました。私はバレー部で休みの日もバレーの練習をしています。バレーはチームプレーだから、チームワークを大切に頑張っています。私は、今サーブとパスの練習をしています。パスは特にアンダーパスが苦手だからコントロールが上手になれるように練習しています。サーブは狙うサーブが入るように頑張っています。なぜ「光るボール」という題にしたのかというと、ボールに青赤緑を混ぜ上から白色で塗り、ボールを目立たせたからです。こうすることで、ボールの印象が変わりました。ついたと思う力は、レイアウトを考える力です。ボールを大きく描き、ネットでパスとサーブの練習を区切りました。最後にこの絵は自分の中で一番頑張った作品だと思います。



＜感想3＞

僕は今卓球部に入って練習に励んでいます。描いた絵は、卓球の試合中です。この絵には、工夫点や改善点がたくさんあります。工夫したことの1つ目は、頑張っている様子を炎で表したことで、2つ目はその炎の色をいろんな色を混色して深みを持たせ目立つようにしたこと、そして3つめは、炎の赤色と背景の緑色で対照の色相にして元気で活発にしたことです。改善すべき点は、色をむらなく塗ることや筆の使い分けです。この絵を描いたことで伝えたい様子、場面を表すための配色・レイアウトを考える力、混色をしていく力などが付いたと思います。



＜感想4＞

私は頑張って泳いでいる自分を描きました。なりたい自分を目指してチャレンジしていることは毎日きつい練習でもあきらめずに頑張って泳いでいることです。最近きつい練習が多くてあきらめたくなくなることがあるけどここであきらめちゃうとジュニアオリンピックに行くこともできないし、ライバルの人に勝つことができなくなってしまうから、毎日頑張って泳いでいます。大会でライバルの人に負けないように必死に泳いでいる場面を描きました。工夫したところは、迫力が出るように、手前の手をわざと大きく描いたところです。水の中で泳いでいるように、背景を薄い水色で塗りました。どんな風に描いたら迫力が出るかを工夫し、手前のものを大きくして描く力が前よりもついたと思います。



(2) タクソノミーテーブルによる目標群と具体的活動例の設定は有効であったか。

各領域における目標が明確になり、達成状況を判断しやすくなった。また各段階における参考となるポートフォリオや資料の活用方法が明らかになり、計画的に指導することができた。今後は、各領域の関連性を考慮した指導計画や目標達成の手立てとしてさらに有効なメタ認知に係る具体的活動例の設定が必要である。

(3) ドキュメンタリーポスターの作成は生徒の自己実現に有効であったか。

生徒はドキュメンタリーポスターを作成することにより、自分自身の作品作りを振り返り次のような感想を書いている。このことから制作過程を写真で振り返ることにより工夫点や苦勞したことを整理したり、大きな流れで自分自身の制作姿勢をとらえたりし、肯定的に自分自身を見つめることができたのではないかと考える。

○ ドキュメンタリーポスターを作って自分がよかったと思うこと（抜粋）

- ・工夫点・苦勞したところ・自信のあるところをみんなに見てもらえてよかった。
- ・今まで頑張ってきた過程が思い出せた。
- ・言葉だけでは、伝えにくいことがポスターで伝えることができた。
- ・大好きな楽器を描きもつと好きになったことに気付いた。

(4) ドキュメンタリーポスターと作品による相互鑑賞は生徒の自己実現に有効であったか。

生徒は友達のドキュメンタリーポスターと作品を見て次のような感想を書いている。これらの感想からは、制作過程に注目し、主題と[共通事項]（色や形やイメージ）との関係を理解したり、制作姿勢や意欲について自分と比較しながら感じとろうとする姿勢が見られる。また、自分のこだわったところを友達から評価されたことへの喜びも感じられる。さらにコミュニケーションスキル等についても言及している生徒もいた。

○ 友達のドキュメンタリーポスターを見てよかったこと

- ・作品の変化・作者の気持ちがよくわかった。
- ・自分と同じように一生懸命考えて描いていた。
- ・写真をもとに質問することができた。
- ・本物らしくなる混色方法がわかった。
- ・効果的な配色がわかった。
- ・様々な段階があったことが一目でわかった。
- ・ポスターのレイアウトの工夫が参考になった。
- ・こだわりが色づくりの工夫から分かった。
- ・どんな意図でどんな色を使ったのかわかった。
- ・どれくらいのペースで描いていたかわかった。
- ・途中からよく進み始めたことが分かった。
- ・完成後に、次に頑張ることを整理していた。

○ 友達に言われてうれしかったこと

- ・自分のこだわった色をほめてもらった。
- ・リアルだね。背景の色がいいね。
- ・点描を使って芝生らしくなっているね。
- ・配色がいい。 ・上手だね など

○ 交流に際しての気付き

- ・失敗談を語ってくれてわかりやすかった。
- ・ジェスチャー付きの説明がわかりやすかった。

表4・5は7月と12月に実施した美術アンケートからメタ認知に係る項目の抜粋である。「4 自分の作品のよさや工夫点を言える」の肯定的評価(思う)が全体(表4)では7.5%増加し、個人(表5)では36.6%の生徒の評価が向上したものの、他の項目の中には、低下したのものがある。

表4 美術アンケート全体の結果

項目		(単位:%)			
項	目	調査月	思	う	思わない
1	自分の作品をいいなと思ったことはありますか。	12	35.0		65.0
		7	37.5		62.5
		差	-2.5		2.5
2	自分と友だちの作品と比べて、自分のよさに気付くことはありますか。	12	40.0		60.0
		7	45.0		55.0
		差	-5.0		5.0
3	自分と友だちの作品と比べて、足りないところを気づくことができますか。	12	85.0		15.0
		7	90.0		10.0
		差	-5.0		5.0
4	自分の作品のよさや工夫点を言うことができますか。	12	65.0		35.0
		7	57.5		42.5
		差	7.5		-7.5
5	作品を見て次はこんなことを頑張りたいと感じますか。	12	82.5		17.5
		7	90.0		10.0
		差	-7.5		7.5
6	自分の作品をもっとよくしたいと思いますか。	12	92.5		7.5
		7	92.5		7.5
		差	0.0		0.0

思う:とてもそう思う・そう思う、思わない:あまり思わない・思わない

表5 美術アンケート個人評価の変化

(単位:%)

項目	評価の変化[7月→12月]		
	向上	変化なし	低下
1	31.7	43.9	24.4
2	34.1	41.5	24.4
3	17.1	61.0	22.0
4	36.6	39.0	24.4
5	26.8	56.1	17.1
6	19.5	63.4	17.1

7 おわりに

個々の生徒の感想から自己実現に係る多様な気付きが見とれたことから、今後も題材の工夫やタキソノミーテーブルの設定、ドキュメンタリーポスターの作成と相互鑑賞を継続していきたいと考える。またアンケートにより明らかになった課題を踏まえ、題材の目標や具体的な生徒の活動を明確にしたうえで、一斉及び個に応じた適切な指導と評価ができるよう取り組んでいきたい。

<注及び引用文献>

- 1) 文部科学省:「中学校学習指導要領」, p. 84, 2008年, 文部科学省.
- 2) 文部科学省:「中学校学習指導要領解説美術編」, p. 81, 2008年, 日本文教出版.
- 3) 福本謹一, 水島尚喜編著:「平成20年度改定中学校教育課程講座美術」, p. 121, 2009年, ぎょうせい.
- 4) 吉川和生, 中島敦夫, 大和浩子, 内田雅三, 中村和世:「美意識を育む図画工作科・美術科の授業開発—タキソノミーテーブルの開発実践を通して—」, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, no. 40, pp. 249-251, 2011.